

ナチズム初期とドイツ社会学

鈴木 幸 壽

問題の所在

1978年、私は丸善の「學鐙」に「ナチス治下の社会学」と題する短文を寄せた。⁽¹⁾これは戦後一貫して私の脳裡から離れなかった問題であり、たまたま掲載したものの、ドイツ社会学史上空白部とされているナチス時代の社会学が、果してどのような状況下におかれていたかは必ずしも明確ではなかったので、問題を自分自身に課する意味も含めて扱ってみようと考えたのである。しかし当時はごく限られた文献しかなく、纏める段階でこの文献不足が本格的研究を許さなかった。それまで私は、主として第2次大戦後のドイツ社会学の動向、あるいはその問題点、さらには旧東独社会学の現況報告などに専念してきたが、1933年以前と1945年以後のこの空白をどのように満すべきか、またそれをいかなるかたちにせよ満すべき必要があると考え、文献が出るたびに目を通してきた。当然のことながら、これは社会学史を研究する者に課せられた使命である。それから10年、1988年に至って私は「ナチス治下のドイツ社会学—シュエルスキー (H.Schelsky)、ケーニッヒ (R.König)、ダーレンドルフ (R.Dahrendorf)、ラムシュテット (O.Rammstedt)、レプシウス (M.R.Lepsius) らの諸論をめぐって—」を発表し

た。⁽²⁾この中では、ドイツ社会学史にとって、この期間が文字通り「空白期」ないし「断絶期」であったか、そうではなく「連続期」と捉えるべきであるか、という論争を採りあげ、私としては、いわば「連続説」を認める方向で結論を提示した。

たしかに、1933年のヒトラーによる政権掌握 (Machtergreifung) 直後からナチス体制崩壊の1945年まで僅か13年間ではあったが、それまでワイマール時代に隆盛をみて、世界の社会学をリードしたドイツ社会学が消滅の危機に曝されたことは歴史的悲劇といってもよい。こうした事実を証明するものとして、この間ドイツの社会学者が141名も亡命を余儀なくされた事実を挙げるができる。⁽³⁾これら社会学者は亡命先、亡命時または大学関係者、研究所勤務者など異なるものの、これほど多くの亡命者が海外に出てしまったことは稀有のことであり、このことによって受けたドイツ社会学の打撃は計り知れないものがあったとみてよいであろう。従ってドイツ社会学は死滅したと考えるのも当然である。仮りに若し日本でこのような状況が起ったとしたら、おそらくその打撃は想像を絶するものがあるだろうと思われる。

ともあれ、この空白期における社会学を扱うことが取りあえず緊急の課題と考え、前掲論文

に続いて再度採りあげることにしたが、実は1933年と1934年が亡命の第一波としては最も多く、両年で103名(1933年75名、1934年28名)を算えている。したがって本論稿ではこの二年間を中心に概要を述べたい。

K.ヴィッテブールは亡命社会学者を6つのグループに分けている。第一グループは大学教授資格試験合格者で研究教育に従事していた者、これが40名おり、この中には日本でも知名度の高いT.アドルノ(Theodor Adorno, 1903-1969)、T.ガイガー(Theodor Geiger, 1891-1952)、M.ホルクハイマー(Max Horkheimer, 1895-1973)、E.レーデラー(Emil Lederer, 1882-1939)、K.マンハイム(Karl Mannheim, 1893-1947)、F.オッペンハイマー(Franz Oppenheimer, 1864-1943)などが含まれている。第二グループは、社会学的問題を扱っていた、広い意味での社会学者に算える、大学教授有資格者を含んでいる。これが総数で23名である。この中で知名人は、H.ケルゼン(Hans Kelsen, 1881-1973)ぐらいではあるが、法律学者や経済学者が含まれている。第3グループは、亡命に至るまでに学位号を取得し、研究・教育に従事していた者のほか、学位号取得後直ちに亡命したものを含んでおり、総計26名である。この中にはN.エリアス(Norbert Elias, 1897-1990)、E.フロム(Erich Fromm, 1900-80)、R.ケーニッヒ(René König, 1906-92)、L.レーベンタール(Leo Löwenthal, 1900-93)、K.A.ヴィットフォーゲル(Karl August Wittfogel, 1896-1988)らがいる。第4グループは、研究面では社会学を扱うか、もしくは亡命後社会学に転じた者で11名であり、著名学者はH.アレント(Hannah Arendt, 1906-1975)である。第5グループは、亡命前研究教育以外の政党、団体、新聞界などで活躍していた者であり、24名を算える。この中には、キ

ル大学でテンニエスの下で助手を勤めていたE. G.ヤコビィ(Eduard George Jacoby, 1904-78)のようなテンニエス研究の第一人者もいた。このほか、S.クラカウアー(Siegfried Kracauer, 1889-1966)やR.レーベンタール(Richard Löwenthal, 1908-)、S.ノイマン(Sigmund Neumann, 1904-62)、F.パッペンハイム(Franz Pappenheim, 1902-64)がいた。最後に第6グループは、ごく広い意味で社会学者に入れて考えてもよい者で、グループ5と同じく政党や団体、ジャーナリズムで活躍していた人たちが17名を算える。この中には著名人はいない。

グループ1から6までの学者研究者などのうち、33年から34年にかけて逸早く亡命した者はグループ1と2で47名、従ってグループ3、4、5、6で56名いたことになる。⁽⁴⁾このような事実関係を土台にして本論に入ることにする。

DGS (Deutsche Gesellschaft für Soziologie) の解散

DGS最後の会長F.テンニエスが学会で全くその力を失うに至った経緯は、1933年12月29日開催されたDGS評議員・運営委員の合同会議において、解散か反対かの表決がおこなわれ、14名のうち7賛成、6反対、1棄権によって決定されたことに詳しいが、H.フライヤーが会長(President)ではなく、何とフューラー(Führer)の名称で職に就いたのである。⁽⁵⁾この解任はDGSが内部崩壊に直面し、いわゆる「強制的画一化」(Gleichschaltung)が次第にDGSに浸透したことを意味している。むろんこのような研究教育面での制約は、より具体的に「ケルン四季報」の廃刊という事態にあらわれている。⁽⁶⁾さらに追い討ちをかけられたかのように、第一級の著名な社会学者のみならず、若年世代の社会学者も亡命したのである。

このようなことの成り行きから、それを明ら

かにするためにいわば一種の「神話」が作られた。その「神話」とは何か。社会の現実を記述し、そして批判をすることを研究分野としている学問を全体主義国家は大目にみることはいえない。したがって社会学は、国家社会主義的支配体制からみれば一仮りに危険な学問ではないとしても一やはり好ましい学問ではないので廃止すべきだ、とする「神話」である。こうした指摘に対して、比較的もっともらしい反論が出された。それは、例えば、労働科学や農村社会学などにみられる「経験的社会研究」(empirische Sozialforschung)が盛んになったこと、さらには教育上の催しがおこなわれるばあいには、「社会学」という名称がたびたび使われたり、「社会学的」という形容詞のついた著作が出版された、といったことで証明されたのである。1933年、1945年という歴史的変革の年とは無関係に、理論的研究、経験的研究がおこなわれたといってよいのである。H.フライヤー、A.ヴァルター、R.トルンヴァルト、H.L.シュトルテンベルク、A.フィーアカント、W.ゾルバルトといった社会学者は、理論的な立場を基本的に変更することなく研究を続行したのである。⁽⁷⁾こうした学者の薫陶を受けた若い学者が戦後を担った社会学者としてその当時に養成されたといつてよい。例えば、G.H.ヴァイペルト(Georg Heinrich Weippert, 1899-1965)、A.ゲーレン(Arnold Gehlen, 1904-76)、W.E.ミュールマン(Wilhelm Emil Mühlmann, 1904-)らがそうである。⁽⁸⁾アカデミックな研究がこのような人々によって継続されてきたのに対して、1933年後社会学の終焉というテーゼの出発点になった経過、つまり断絶とまでではないにせよ、いささか社会学にとって障害となった経過があらわれているのである。しかし継続を証拠立てるような社会学(的)業績がみられたとはいえ、やはり依然としてナチズム時代に社会学の終焉をみた

とする見解を無視しえないともいえる。その端的な事実が1933年および1934年、ナチスが成立してから2年間の状況にはっきり現われている。その事実とは何か。社会学雑誌の廃刊にとどまらず社会学者の団体(DGS)の解散、社会学講座の名称も消失したことである。むろんその代りに「国家社会主義的社会学」といったものが出現したわけではなかった。社会学の断絶とその継続の二つのテーゼを慎重に考慮すると、矛盾した結論が出てくる。それは、社会学が撤廃されたといいながら、1933年から34年にかけて、前述のように若干集中的に研究の実績がみられたからである。この矛盾を解消あるいは解決するために必要な理解は、社会学という学問の営みの解明に当って、それが「有用である」ということを明らかにすることが前提になる。

フライヤーと理論社会学者たち

断絶論の論拠は、全体主義的体制、かつ純血主義的体制が社会の科学的研究や理論的貫徹などは到底許さないとするところにあった。この問題をより鮮明にするためには、1933年から34年の変革期におけるH.フライヤーを取りあげることが重要である。1930年、かれは『現実科学としての社会学』のなかで、社会学の内容についての論争に介入を試みた。⁽⁹⁾かれの社会学のコンセプトは、1931年の『右翼革命』や権力掌握後のかれの社会学的プログラムに即した論文が示す通り⁽¹⁰⁾、かれの政治哲学に盛り込まれていた。つまりかれに依れば、近代社会は〈国家と社会〉とが別個に出現したことを特徴としているのであり、普遍的なものとしての国家は社会を構成する特殊利害に対処するものなのである。⁽¹¹⁾フライヤーはこうした〈国家と社会〉との関係が現実に書き出され、説明ができるところに「社会学」が始まるというのであって、つまりは、一般的な事象を社会的な特殊利害に

よって採り出すばあいには「社会学」が生まれるとするのである。かれに言わしめれば、フランスやイギリスの社会学に比べドイツのそれが勝れている点は、まさにこうした〈国家と社会〉の関係を現実的かつ徹底的に捉えたことにあり、これこそドイツの遺産なのである。さらには、イギリスやフランスの社会学のばあいは、市民社会の正当な解釈が歴史の動きを陰蔽し、そのことによって虚偽にまで行きつくのであって、こうしたドイツ社会学の出発点にはL.フォン・シュタインがいる、とまで述べている。⁽¹²⁾ マルクスに就いて言えば、フライヤーは、きわめて物わかりのよい読者であるし、『ヘーゲルの法哲学批判』や『ドイツ・イデオロギー』といった著作にも理解を示してはいるものの⁽¹³⁾、1933年以降はもはやおよびではない。フライヤーにとって英仏の社会学と基本的に異なるドイツ社会学とは、その現実的・歴史的萌芽をもつことである。つまりドイツ社会学は〈国家と社会〉の現実的關係を捉えるだけではなく、またその関係の中で示されるイデオロギー形式だけを正しいと考えたのではなく〈国家と社会〉の止揚という課題を果すべき学問なのである。まさに〈国家と社会〉の止揚、換言すればその再統合がフライヤーのばあいはねらいだったのである。権力継承後フライヤーは新しい意図的な民族共同体の中に統合過程の歴史の始まりをみた。⁽¹⁴⁾

このように考えると、長い目でみて社会学はフライヤーからみれば、不必要なものだったのではないか。とはいえ一方において現代および中期的にみて必要性を認めやはり存続したのではないか。というのは〈国家と社会〉の統合は、新しく、まだ知られざる形式のなかで見出さねばならないという長期的プロセスを前提にしているからである。社会学はこうした発展を意味づけ、方向を示しつつ進んでいくべきである。社会学のもつ科学性が最終的な成功を確保しう

るし、そして社会学は〈国家と社会〉の止揚に協力はするだろうが、やはりこうした固有の権利を止揚するのは歴史的過程においてであって、そうした歴史過程においてこそ重要な役割を演ずべきである。

フライヤーの概念は、少なくともムッソリーニ治下のイタリアの国家理論をファシズム的と見做す限りにおいて、あきらかにファシズム的である。⁽¹⁵⁾と同時にまた新らしい国家論を基礎づけたといわれるヘーゲル右派の国家理論とも一致する。この辺りに全体国家の新ヘーゲル派的理論家が現われている。J.ビンダーとかK.ラレンツら⁽¹⁶⁾であるが、かれらは現実になった民族統一の体现者として「総統」(Führer)を強力に持ち揚げたが、〈国家と社会〉の分離を止揚するという点では同じ考え方であった。さらにはE. R.フーバーの国家学の復興のための構想、1933年「タート・クライス」を社会学において代表していたE.W.エッシュマンの構想⁽¹⁷⁾は、たしかにフライヤーの立場とは異なるものの、議論を廻って排他的な対立があったとは言えない。

しかし、フライヤーの社会理論的概念は、決して歴史的裂け目を示しているわけではなく、回帰的伝説ともいうべきゲマインシャフトに基づいているのである。つまり「ゲマインシャフト」なるものは資本主義の現実を超克するドイツ市民の願望に近い姿をもつものであったといえる。⁽¹⁸⁾このことはすでに『青年運動』(Jugendbewegung)⁽¹⁹⁾の広い範囲内で見られ、ドイツの青年たちにとって、ドイツの解放戦争の国民主義的自由主義のイデオロギー、そして1848年の市民の高揚の結果として社会的・政治的解放こそが魅力であった。いわばこの『青年運動』は共和国と民族共同体の対立というかたちで、1920年代に政治的に形成されたのである。ディルタイあたりの精神科学的伝統を歴史に対する無関心さの批判としてとりあげないだけで

はなく、そうした批判は、F.クリューガー⁽²⁰⁾の全体哲学、またドイツと西欧的思想の対立という文脈で採りあげている。ジンメル以来、というよりはむしろまさにヴィーゼとフィーアカント以来といってよいが、ドイツ社会学におけるテーマとされてきたもの、つまり社会態の形式的なメカニズムを見出そうとする試み、それは社会学の純粋な対象にはなりえないというわけである。ジンメル、フィーアカント、そしてヴィーゼらの所論に見られる非歴史性は、フライヤーからすれば、それが本来の歴史的課題からはずれているために、やはりドイツの思考への逆戻りであるし最終的には反動的とみなさざるをえなかった。⁽²¹⁾歴史的思考において、また統一的なゲマインシャフトにおいて、「ドイツ的」なものを知りうると信じてきた「ロマン主義」の出現以来、フライヤー的な批判は、非合理主義的・反デモクラティックな伝統に容易に没入していったのである。とはいえ、このフライヤーでも、こうした伝統の完全な意味での代表者ではない。ナチズムという新しい秩序に魅せられ、それに応えようとする知的風潮は確かにフライヤーの概念にもあったが、しかし、新しいドイツを作りあげようとしたほんの一部分を担ったにすぎなかった。それは、民族や農民層を神秘化したM.H.ベーム⁽²²⁾とかG.イプセン⁽²³⁾などとフライヤーは一線を画していたからである。フライヤーにとって「民族」とは単なる歴史的カテゴリーにすぎなかったのである。さらにいえば、フライヤーは、K.ドンクマン⁽²⁴⁾やかれと同学の士らが普及させた民族共同体の理念の代表者とは限らない。かれらはむしろ家父長的身分国家の秩序、反民主主義といった立場に立っているため、O.シュパンやF.ビューロなどの考え方に近いのである。

ナチズムの時代を構成するのに寄与したこの他の言説をフライヤーは採りあげてはいない。

ましてや社会の生物学的解釈者や人種衛生学者などではなかった。フライヤーの構想にはある面で決定的にファシズム的なところがあったが、他面ナチズム的あるいはナチズムに傾斜した思潮を受け入れなかったところもあったといえる。ナチズムへの傾斜だと見てとれるような思潮は、ナチ党員は権力奪取以前にも持っていたのであり、いな政治運動としてはすでにみられたのである。ただこのような政治運動から多くのこうした思潮をもつ代表者は一定の距離を保っていた。したがって1933年という年、また少くとも社会学的理論に関する限り、断絶とみなすほどの状況はなかったとみてよい。ここまでみてきて明らかなことは、権力奪取以前のドイツ社会学は、考えられているほど民主主義的であったり批判的であったりしたのではないということである。

ナチス主義者の社会学者に対する関係、またこの逆の社会学者に対するナチス主義者の関係を考えたばあい、理論を反映するかれらの政治的实践に簡単に還元できないものがある。ナチズムを受け入れ、支持した人びと、そしてまたフライヤーの場合も、部分的にみて一定の同質的な知的伝統が継続していたことは明らかである。さらに社会理論家のナチズムに対する関係はどうなっているかといえば、これも最終的には継続関係にあった。したがってフライヤーが実現しようとして果たしえなかった願望、つまり世界史的な願望の実現はあきらかにできなかった。この意味ではフライヤーだけが孤立していたわけではない。何らかの構想が、ナチズムという特定の視点に組み込まれると、政治的意味をもつようになり、構想自体が期待を裏切られたに違いない。知的な願望を政治的現実へ投射すると、のびきならない状況に陥入り、その結果、知的願望を断念したり、また国内亡命を余儀なくされたりする。とはいえ、

こうした期待外れは、ナチズムが本当は責任がなかったのでは、おそらくは余り苦痛とならなかったであろうと思われる。それは期待はずれを堂々と口に出すことについていえば、ナチズムの時代には確かに不可能だったからである。まさに国家がすべての反対論を禁じたことでもあきらかである。すべて中央の下す判断基準に対する異議申立ては禁ぜられた。これは何もマルクス主義や反マルクス主義、民族共同体、反ユダヤ主義、あるいは人権理論、人種政策、はてはデモクラシー、自由主義に限らず、最終的にはナチズムそれ自体に対する異議申立てすら禁止されたわけである。ほとんど大部分の当時のドイツ社会学者は、このような判断基準のすべて、また少くとも若干の判断基準に対して自己の所説の正しさを証明することは遺憾ながら不可能であったし、ましてやあらゆる点で同意を示すことを要求されることはなかった。フライヤーのように反自由主義、反デモクラシーの立場に立つことができたし、また人種問題について沈黙を守ることでもできた。それよりも、A.ゲーレンのように、公然とナチ党員を名乗ることもできた。さらに人種主義的な解釈を含まない人間学的な理論を打ち出すこともできた。むろんこうしたことの前提には、公式の判断基準を公然と疑ったり、はっきり相対化したりできなかったことがある。

ナチズムというものを矛盾に満ちたものとして腹に納めることをしないで、とにかくナチズムを受け入れることができると同じ様にナチズムが作りあげた精神的伝統を見捨てることをしないで、このナチズムに沈黙的な反対者になることもできない相談ではなかった。例えば、1934年にミュールマン(W. Mühlmann)は“sociologus”の中で民族主義的政治を純粹に精神的革新運動、そして統一運動の試みとして示すことによって、外国での反ドイツ的風潮を

受けとめようと試みている。⁽²⁵⁾かれは、特に公的地位に一線を画すこともしないで、次の時代に次第にナチズムの反対者になった。しかしいわゆる転向者ではない。もう一例挙げれば、純血主義者H.F.K.ギュンターなども当初から人種論的「独断主義」には反対の立場をとっていた。ミュールマンは、1947年に公表した日記の中でナチ国家への批判をしているが、もしそれがナチの秘密警察の手にでも渡ったならば、かれは殺されていたかも知れない。1944年かれは見知らぬ人種に対する軽蔑に反抗し、また「人非人」という発言にも反抗している。⁽²⁶⁾しかしミュールマンのこうした拒否的態度は決して人種主義の論議のやり方自体に対する反対ではない。かれの次の言が確証している。「違います。ゴビノー(J.A.de Gobineau)、チェンバレン(H.S. Chamberlain)、ラ・プージュ(V.de Lapouge)らの考え方は全く違っていたのです。何人も軽蔑されるべきではない、何人も抑圧されるべきではない」。⁽²⁷⁾同様に優生学者も断種を望んだが、安楽死を望んだのではないだろう。結局人種政策は劣等者自身の手におちたのではないだろうか⁽²⁸⁾と思われる。いかに鋭い反ナチズム批判でさえ、ナチズムのために理論構成をしたその理論形式をどうしても見捨なかった。ナチスの政治的实践について失望をかくせなかったプロジェクト、倫理的な驚きが、結局国内亡命と政治的な新らたな評価を導き出しえたのは、ナチズムを形成した論証的形式が何であったかを検査すべきであったなどということを意味しないのである。別言すれば、ナチズムは行政上、政治的、そしておそらくは世界史的な変革として出現したが、必ずしも学問の発展を直接阻んだわけではない。ナチズムを基礎づけた論拠についてみても、多くの政治的選択が未解決のままになっていれば、確かに批判が加えられたであろうし、またそうした批判も突込んだものでは

なく、きわめて明確にナチズムに向けられた言説であって、その拡がりに対して罰を加えることが目立ってきた。どうやらいかなる政治的実践がおこなわれたかが背景にあるようである。これを裏書きするかのような実例がある。ナチ党が選挙で大きな成果をあげた⁽²⁹⁾1930年9月14日にG.ブリーフス、C.エッケルト、H.ヘルクナー、そしてA.ウェーバーがヒトラーに書翰を送り、その中でかれらは、批判的にヒトラーの計画、とくに貢租義務を負った階級の破棄、を問うていた。この返答は「フェルキッシヤー・ベオバハータ紙」(Völkischer Beobachter)に掲載された。「あなたの親衛隊はどこにいますか。街頭に出て、大衆集会へ行き、あなた方の立場を貫徹しようとするならば、私共が正しいかあなたが正しいかどちらが正しいかを知てください。」⁽³⁰⁾なぜ学問の領域において、体制の批判的圧力がそれほど重苦しくのしかからなかったのかについては、政治的主眼点を実践第一主義においたことによって説明できる。人種イデオロギーによって異人種と見做され、そしてナチズムの敵と刻印されることによって、第一段階で人びとは抑圧されたのである。したがって彼らは下手にナチズムに取り入る必要はもはやなかったのである。この典型的な例としてT.ガイガーの場合を挙げておこう。かれは1934年に『優生学、その基礎、計画、限界』を発表した。またすでに1932年には『ドイツ民族の社会的階層形成』を著わし、1932年以前に社会主義党に参加したことやナチズムに関しても言及したが、このことについてかれは弁解の余地がなかっただけでなく、ワイマール時代の現象学的社会学で多大の注目を浴びた『総統(Führer)』の政治的・社会的姿を頭に描いていた。

むろん、ナチズム、国家、人種主義、民族共同体に反対できなかったわけではない。しかし、明確に反対の意志を表明しないうちは、自分の

研究をさらに進めることもできたのである。むろん、その後再び難しい局面が第二段階としてあらわれた。それは何か。アカデミズムの自由の制限、外部からの干渉の増大、伝統的なその筋からの制裁権力の強化、そしてできるだけ隷属させておくことなどであり、こうしたことが学問的敵対や個人的敵対をお上の基準で曲げて解釈することすらおこなわれた。しかし、このようないわば理論上と、行政上のいわば塹壕戦は普遍的理論によっても解決しえなかった。この塹壕戦ははじめからはっきりした装置によって固められていた。⁽³¹⁾ヴィーゼのばあいについて例を挙げておく。ナチスの迫害として指摘される多くは、実際はこうした下級行政レベルに根付いたものである。ナチズムが原則的に社会学に対してははっきり敵対者であったとしたら、ナチズムは当然明確な敵として社会学を考えたに違いないだろう。社会学を代表した多くの人びとは、そうした敵に属さないのである。つまり敵とみなされたのは、ユダヤ人の社会学者だった。かれらは亡命しなければならなかった。もっと悪いことが加えられなかったにせよ、しかし敵は、社会学者であった。なぜならはじめから学問上の発言のためではなくユダヤ人であったからである。社会学が事実上、一つのユダヤ的学問であったという、ただ人種主義的仮定だけで、ナチズムと社会学の内容的非両立性を導き出しうるのである。ユダヤ系社会学者に起こったことは、すべてユダヤ系社会学者にも起こったし、また、ナチズムへの明白な反対者であった社会学者に起こったことは、すべてのナチズム反対者と共に起こった。1933年以後のあらゆる軋轢や妨害は決して社会学者に向けられたものではない。それはどうやらすべてのアカデミズムのシステムに貫徹している。換言すれば、すべての社会学者と同様に、社会学者を敵と考えるところでは、正確に内容的な主

題が論ぜられたのである。

断絶論の根拠になっている社会学とナチズムの非両立性は、ともかくも、芸術史や経済学などとは違って、やはりもう一度認識しうる。社会学理論の特別な内容にとって、それは特別な確認しうるばあいにおいてのみ重要なので、こうした相互敵対性は、ナチズム信奉者とまた然らざる他人とが社会学をどう考えるかと関係があると思う。1933年までは、「社会学とは本来何なのか」について、必ずしも一義的に説明できなかった。それが何であるかをめぐる争いは、1933年にすでに中途半端であり、その解答もまだ出ていなかったのである。組織上は強力で個々のポストで、例えばヴィーゼは「関係学」(Beziehungslehre)を定義づけの規準として押し通そうと闘った。オッペンハイマー(F. Oppenheimer)は社会学を普遍的な社会の学(Gesellschaftswissenschaft)として理解したし、フィーアカントは社会学を現象学的に、そしてテンニエスは、根本形式の純理論を、ヴィーゼとは異なるものを探求した。さらにザロモン(Gottfried Salomon)は歴史的過程の理解を、トルンヴァルト(Richard Thurnwald)は、基本形式への経験的に基礎付けられた探求を、ヴァルター(Andreas Walther)は、部分的に他の根拠からであるが、シュタインメッツ(Sebald Rudolf Steinmetz)のように社会学を経験的学問分野とみようとしたのである。この時代に辛うじて二人の社会学者だけが、「社会学」とは何かについて意見を持っていたにすぎない。かれらは、社会学とは<社会の学>であるという点で一致しようと努めることができたので、「社会」とは何かについて再び採りあげることはなかった。⁽³²⁾ そのほかに経済学、教育学、法学、また法哲学との対応とくに排他的ではないが、<社会の学>(Gesellschaftswissenschaft)たらしめる要求もないではなかった。

「社会学」か「社会の学」かといった、このような論争は退屈である。より重要なことは、社会学の本質は何か、そして不十分さを免れないようにみえる理論を構成し改善していくことである。まさに「社会学は本来何であるか」という問題は取るに足らない命題にすぎないとみなされる。

1920年代の議論を見ていくと、いかにも、当事者が命名に拘わって重要視していたかがわかる。この議論はすでに在った事の本質を徹底的に究明することを口先だけでカモフラージュ、つまりは体裁をつくらったので、かえって本来何が重要かが隠されてしまったのである。アカデミックな制度化された社会学という専門分野の学問を作り出せなかったのである。少なくとも1920年にはまだ存在しなかったものについて、社会学の本質を語ることは、いわば一種の念願に近いものであったのであるが、社会学がれっきとした存在であることは争いない事実であって、1933年時点でも、専門学術誌、教科書、そして専門図書館などの存在によってこれを証明できたのである。⁽³³⁾

1933年以前に色々な形で社会学の〈本質〉論が数多く論議されるたびに、社会学を制度上安定させて、アカデミックな学問分野として位置づけようとした。社会学についての統一的理解を作り出そうとする試みは、マンハイムによって1932年にその概要が示され頂点に達した感があるが、土台、この学問は何であるかを公けにあきらかにする努力と同時に、社会学に関係する社会学者自身が、この専門分野と一体化すること、そしてそのことによって、社会学と非社会学とが区別されるのである。しかし、アカデミックな社会学の公式に認められた社会像は、内部でのさまざまな議論のなかでみられる多様性と異質性に即応するものではない。⁽³⁴⁾ それは結び合わせたり、融合したりすることのできる

ものであったが、異質的な起源をもつ意味で若干伝統的な言い廻しから構成されていた。アカデミックな多くの社会学者は、距離を保とうと努めた、その文脈で〈社会学なるもの〉は伝統的な言い廻しに結びついたのである。〈社会学〉はこうして内在的にほとんど不当な、だがしかし防御しにくい攻撃の標的にされたのである。その急尖鋒はトライチュケ(Heinrich von Treitschke, 1834-96)であり、かれは〈社会学〉が国家に反対して独自性をもつ社会を承認したり、また学問的に正当化したりすることについて疑念をもっていた。⁽³⁵⁾こうなると勢い、自由主義に反対した社会学を政治的・経済的自由主義と関連づけることでトライチュケの疑念をはらすことになった。たしかに、1918年以前、その後もリベラルな経済学者、社会学者は存在していた。したがって学問の分野それぞれ自体がリベラルであったということはやはり言い過ぎだと思われる。

もう一人ディルタイ(Wilhelm Dilthey, 1833-1911)も社会学の反対者であったが、かれの社会学に対する攻撃は、コント、とくにスペンサーにみられる伝統的な実証主義に向けられた。⁽³⁶⁾しかし、かれは社会学が英・仏からの〈輸入学問〉だとする常套談を世間に広めたし、その後また社会学は〈非ドイツ的〉だということになった。もちろん、ジンメルは、スペンサー流の有機体説の後継者とは全く異った〈社会学〉ないし〈社会〉の概念から出発した。さらには、DGS(ドイツ社会学会)がはじめて設立(1909)されて以来社会学といういわばラベルの応用範囲が広がったことは確かである。つまり、社会学はかなり通俗化し、とくにアカデミックなニュアンスを持つ言葉として使用されるという状況におかれることはなくなったのである。気楽に〈社会学〉という言葉が口から出るという意味では、むしろ親しみさえ覚えるようになって

たといってよいのである。結局ドイツ第二帝国が創立されてから、マルクス主義的な社会民主主義にあっては、政治的議論の中で社会的議論は大学の外でおこなわれていたのである。それでは大学ではどのような議論が交わされていたのか。大学でマルクス主義として認めたものと議論が、ある面では反対の立場、他面では媚びるような立場でおこなわれた。まさに専門の境界を乗り越えるような〈社会学的〉議論が、極端な場合だけは拒否しないものの、そうしたことと関連をもつ〈社会学〉と〈社会主義〉は、公式には幅広く混和していたといえる。⁽³⁷⁾

このあたりの問題と関連するのは、ベッカー(Carl Heinrich Becker, 1876-1933)やフォン・ベロー(Georg Anton Hugo von Below, 1858-1927)の考え方である。⁽³⁸⁾ベッカーの文化政策のプログラム、そしてベロー⁽³⁹⁾の社会学に対する攻撃的態度のなかには、科学政策的関連性がみられる。ベッカーにとって社会学とはいかなる学問であったか、といえば、それは単に専門分化した学問を寄せ集めたにすぎないものであり、一般的に政治的教養に組み入れるべきものでしかない。こうしたベッカー的考え方に対してウィーゼとテンニエスは反論している。⁽⁴⁰⁾ベッカーの構想からすれば、かれはアカデミックな社会学の最も重要な文化政策上の促進者の一人だったのである、したがって、もしアカデミックな専門科学としての社会学が、ワイマール共和国の産物でないと見做されるとしたら、驚くべきことになっただろうと思われる。⁽⁴¹⁾多くの反共和国的な教授たち、そしてその背後に多くの一般の人びとが知っていた保守主義者ベローの社会学に対する攻撃も、こうした考え方に即したものであった。⁽⁴²⁾議論が実証主義的であっただけに、むしろ非ドイツ的だったといえる。逆に言えば議論そのものは自由であるし共和制的であり、したがって社会主義的

でもあった。ベッカーのような大学政策構想にあっては議論が大学側に押しつけられる結果、ドイツ文化に対する社会主義的な攻撃と受けとられるのであろう。自分自身で社会学者として立ち現われたあのシュパンと手を結ぶということをベローももちろん許した。⁽⁴³⁾社会学に関する本質的議論が広く自由主義、社会主義、共和国と結びついてなされたので、それに加えて反ユダヤ主義が課せられたのは何ら不思議ではない。まさに社会学は、単なる民主主義的、社会主義的学問のみならず、ユダヤ的学問でもあったのである。1933年から1934年にかけてアカデミックな社会学が当面したものは、ユダヤ系学者そして非ユダヤ系ではあるが政治的に嫌われた学者の追放と並んで、社会学を公式に認めたものの、そのアカデミックな制度化、つまり大学において社会学を正科目と認めることに対する反抗であった。したがって、「ドイツ社会学会」と「ケルン四季報」が閉鎖されたり刊行中止になったりしたことは、特定の社会学的概念への反動であったわけではなく、それまで専門の学問分野として作りあげてきたまさに「社会学なるもの」への反対であったとみてよいのである。たしかにフライヤー、ヴァルター(Andreas Walther, 1897-1960)、シュトルテンベルク(Hans Lorenz Stoltenberg, 1888-1963)らによって、社会学に新風を吹き込むといった試みがなされたが、社会学を<民族科学>(Volkswissenschaft)と名称を変えたり、<民族学>(Volkskunde)に近づけようとしたルンプ(Max Rumpf, 1878-1953)が失敗したと同じように、かれらの試みも明確な政治的不信感に対応できずに失敗した。⁽⁴⁴⁾「ケルン四季報」に代って学会誌になった「民族の鏡」(Volksspiegel)も次第に薄い存在になっていったということは、制度化された社会学という学問分野も事実上棚上げされたということを意味していたのである。同様にプフェ

ファーズ(Karl Heinz Pffeffer, 1906-) のばあいも、かれが<ドイツ社会学>を創設しようとした試みも、学問の組織上の観点からすれば失敗したといえる。つまりかれらにとっては、既存のジンメルやヴィーゼ、フィーアcantなどのいわば旧社会学にとって代るべき新社会学を樹立するために、かれらなりに努力したが成功しなかったということなのである。換言すれば、制度の上で社会学を解消することは、一時的であれ共通の目印になる点をはっきり打ち出した伝統をこわすことにもなり兼ねなかったのである。したがって社会学は、既成の経済学や哲学、心理学や民族学などの文脈の中で本質的には研究がおこなわれたのである。

結び

本論文での問題提起(Fragestellung)は、1933年時点において、それ以後も含め社会学が消失したとする理解の仕方と、そうではなくてその研究は真摯に継続していたとする理解という、いわばパラドックスにどう答えるかにあたった。以上に述べてきたところからそのパラドックスは解消されたのであろうか。たしかに社会学は科学政策上からみて攻撃の矢面に立たされ、公式には反動と見做されたが、にもかかわらず、これまで挙げてきた社会学の代表的学者は長年全力を傾注して抵抗を試みたといえる。むしろ、効果的には、社会学を制度上定着させることはできなかったが、少なくともこの制度の枠内で進められた研究は、おいそれと簡単に禁止されたわけではない。学問研究の反ユダヤ主義を叩きのめすような打撃が強かったのは確かではあるが、それは必ずしも社会学だけに向けられたのではなく、大学の内外でのすべての知的生産に対して与えられた打撃であった。あくまでも社会学の公式の姿をアカデミックな専門分野としてきたという議論は、実は1945年以

後も生き延びてきたのであって、そのこと自体あるいは科学史のアイロニーに属することかも知れない。少くとも1933年という年に論争的な形がみられたとしても、そこでは何ら断絶がみられなければ、1945年という時点でも同じように考えてよいのではないか。逆に1945年以前にアカデミックな専門分野としての社会学の存在を認める考え方が消極的であれあったにせよ、その前徴候が変化したために積極的な考え方になったと言える。このことは<ユダヤ的>影響を知覚すればしばしば明瞭になる。つまり、他のとくに若い専門分野の学問のばあいと同じように、アカデミックな環境のなかで反ユダヤ的な厄介なものが出来たのではなく、社会学にあっても、多くのユダヤ系の学者が活動していたのである。例えばユダヤ系律法学者のノーベル(Nobel)の周辺にグループをなして集まった。フランクフルト学派の第一世代を代表する人びとのばあい、特に<ユダヤ的な思考形式>が見出されるし、他には例えば、オッペンハイマー(Franz Oppenheimer, 1864-1943)、シュンペーター(Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950)あるいはマンハイムのばあい<ユダヤ的思考>を見出そうとする解釈上の努力を払っても人種主義に限定されることが強い。

このような議論をしていくと、ユダヤ人であること、つまり反ユダヤ主義の定義によるユダヤ人であること、従って犠牲者側に立っているといった特徴は、1933年前では、共和制ないしデモクラティックなレベルで同列だとする考え方と結びついてくる。こうした書き方をするのは確かなことなのだが、非ユダヤ系の学者にとっては反対であって適切ではないが、しかし、社会学という専門分野に共和制的かつデモクラティックな前兆を与えるという点では役立っている。ここでの論議は記述的平面に立っていてかなり議論の余地がある。というのは、ある面

でDGSの多くのメンバー、多くの著名な社会学者が反民主主義的な取り組みをしていて際立っているからである。別の面ではより共和制的に、例えばとくにフィーアカントとガイガー、そして初期ではまたヴィーゼらは、ワイマール共和国の国民形成において振舞っている。しかしかれらが実践面での活躍をはっきり学問的側面と切り離したことは、社会学のアカデミックな制度化の特殊性だといえる。⁽⁴⁵⁾実践面では共和制的考え方に立ちながら、しかし社会学は政治と無縁な学問であると理解されていた。したがってかれらの書いたきわめて通俗的な、民族形成に寄与した論文・著作、そしてまたかれらの社会学的科学的論文・著作は、内容的にみて一体として読み込むことができるのであるが、カテゴリーからいえば、はっきり区別される特色をもっているのである。このようにして、社会学が共和制的そして民主的な専門分野として、はたまた、社会において批判的な審判を下すいわば裁判所としての公式の自画像をもつに至ったことが、ナチス時代においても息付いていたのである。それが1945年、社会学が再び脚光を浴びて登場し、新しい構築のためにその試みとして歴史をふりかえって検討しようとしてきたことの意味合が生きたものになるのである。きわめて単純化されたナチズム時代のドイツ社会学研究には、まだまだ解明と再解釈すべき側面を多く持っている。とくに日本ではこの種の研究が少い。学史の再発掘で何があらたに発見されたかは、発掘者によって異なるので、小論は発見物の普遍性を必ずしもたないが、この程度の成果を除いて見るべきものはない。大方の叱正を期して筆を擱くことにする。

(1994.1.14 脱稿)

註

- (1) 「学燈」9.Vol.75, No.9 1978.9.

- (2) 「社会学研究紀要」第8号 1988. 明星大学
- (3) Klemens Wittebur; *Die deutsche Soziologie im Exil, 1933-1945 - Beiträge zur Geschichte der Soziologie -* Bd. 1 .S.257 Graphik 4 ,1991
- (4) *ibid*
- (5) この件については、R. ダーレンドルフが、A. Flitner編 *Deutsches Geistesleben und Nationalsozialismus*, 1965の中 の “Soziologie und Nationalsozialismus” において、フライヤーを〈ならず者〉と称しているのに対し、シェルスキーはフライヤーがDGSで〈救世主〉として現われたと述べており、きわめて対照的で興味深い。S.108ff.
- (6) L.v.Wieseの “Die Deutsche Gesellschaft für Soziologie-Persönliche Eindrücke in den ersten fünfzig Jahren-” に詳しい。これは *KZfSS (Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie)* 11, 1959. S.11 および Jacoby, E.G. の *Die moderne Gesellschaft im sozialwissenschaftlichen Denken von Ferdinand Tönnies*, 1971. S. 249ff. 参照。
- (7) これらを列挙すると
- A. Walther; *Die neuen Aufgaben der Sozialwissenschaften*, 1933.
- H. Freyer; *Die Romantiker in Grönder der Soziologie*, 1932.
- R. Thurnwald; *Die menschliche Gesellschaft in Ihren ethno-soziologischen Grundlagen*, 5Bde, 1931-35 及び *Soziologie heute*. (Hrg.), 1932.
- H. L. Stollenberg; *Geschichte der deutschen Gruppwissenschaft I*, 1937.
- A. Vierkandt; *Familie, Volk und Staat in ihren gesellschaftlichen Lebensvorgängen*, 1936.
- かれはナチスによって講義中止を命ぜられ、1934年に引退している。
- W. Sombart; *Deutscher Sozialismus*, 1934のほか *Weltanschauung, Wissenschaft und Wirtschaft*. 1938. *Vom Menschen, Versuch einer geisteswissenschaftlichen Anthropologie*. 1938などがある。
- (8) この他 Güther Ipsen, Karl Valentin Müllerらがいるが、いずれも右派社会学者であり、まさにナチス御用学者の名にふさわしい。
- (9) この他フライヤーについては、*Archiv für Kulturgeschichte*, 16. 1926, の中での論文「精神科学としての社会学」(Soziologie als Geisteswissenschaft) 114頁以下、および R. Thurnwald 編『今日の社会学』(*Soziologie heute* 1932)における「現実科学としての社会学」(Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft) 14頁以下で述べている。
- (10) 例えば Freyer の *Revolution von rechts*, 1939, また *Zeitschrift für die gesamten Staatswissenschaft* 95. 1934/35の中 の “Gegenwartsaufgaben der deutschen Soziologie” 116頁以下に詳しい。
- (11) この点については、
- Manfred Riedel; *Der Begriff der bürgerlichen Gesellschaft und das Problem seines geschichtlichen Ursprung, in Studien zu Hegels Rechtsphilosophie*, 1969. S.135 参照
- (12) H. Freyer; *Gegenwartsaufgaben der deutschen Soziologie*, S.118ff.
- (13) 同上; *Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft*, S.91ff.
- (14) 同上; *Gegenwartsaufgaben der deutschen Soziologie*, S.130ff.
- (15) 概略は、E. von Beckerath; *Wesen und Werden des faschistischen Staats*. 1927, および彼の *Faschismus: in Handwörterbuch der Soziologie*, (hrsg. A. Vierkandt), S.131~136, を参照
- (16) かられについては、E. Stölting; *Akademische Soziologie in der Weimarer Republik*, 1986に次のような記述がある。「ロゴス、(正式名は、 “Logos, Internationale Zeitschrift für Philoso-

- phie und Kunst”である。1910年創刊34年に廃刊となる。)は、文化・法哲学の雑誌になってヴァイマル時代の終期頃は、元来リッケルトの新カント派から出て、フィヒテを超えて、新ヘーゲル学派に移り変った国法学者のJulius BinderとKarl Larenz が、法哲学について議論をしていた。」S. 161.
- (17) Ernst Wilhelm Eschmann: Die Stunde der Soziologie, in "Die Tat 25", 1933.3., 4Bd, 2 Teil S.953ff.
- (18) Neuidealismusの動きとして、Julius Langbehnなどに注目したFritz Sternの*Kulturpessimismus als politische Gefahr*, 1963, S.60, S.77ff, S. 111ff に詳しい。
- (19) JugendbewegungについてはJoachim H.KnollとJulius H.Schoepsの“*Typisch deutsch*” *Die Jugendbewegung-Beiträge zu einer Phänomengeschichte*に詳しい。
- (20) Felix Emil Krueger(1874-1948)、心理学者、W.Wundtの後を受けLeipzig Univ.のProf.。Wundtの創造的総合の原理に基づき精神の全体性を複合性と考へ、しかも全体を情的な瀾漫的なものとし、これを発達的に考察しようとする全体心理学の立場に立つ。
- (21) H.Freyer; *Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft* S.57 ff. S.179 ff.
- (22) M.H.Boehmは、1934年“*Volksspiegel*”誌をFreyerやM.Rumpfらと発刊、これを「ドイツ社会学会」(DGS)の機関誌としたことは事実である。
- (23) Gunther IpsenはFreyerと共に、Leipzig Univ.で員外教授であった。第三帝国時代はKönigsburg Univ.で社会学を担当したが、Freyerはかれとは思考様式を異にしていた。
E.Stölting; *ibid* S.138.
- (24) Karl Dunkmannは、“*Archiv für angewandte Soziologie*”を発刊したが、かれのInstitut für angewandte Soziologieと共に、民族改革に資するために作られたものである。社会学の立場は近代世界をも切りくずすものであった。*ibid*. S.185.
- (25) Wilhelm Mühlmann: 1904生、民族学者。
主著、*Rassen und Völkerkunde*, 1936.
Methodik der Völkerkunde, 1938.
Krieg und Frieden, 1940.
“Die Hitler-Bewegung, Bemerkung zur Krise der bürgerlichen Kultur” in “*Sociologus*” 9. 1933. S.129 ff.
- (26) W.E.Mühlmann; *Der heutige Bestand der Naturvölker*, 1944に詳しい。
- (27) W.E.Mühlmann; *Dreizehn Jahre*, 1946, S.90.
- (28) *ibid.*, S.103
- (29) 得票数640万、107名当選第二党となる。1932年7月31日の選挙で203名当選第一党に躍進した。
- (30) A.Schiffrin; “*Gedankenschatz des Hakenkreuzes*” in: *Die Gesellschaft*, 8, Bd.1, 1931, S.97ff. この雑誌は、1924年以降 Rudolf Hilferdingによって発行された。副題は“*Internationale Revue für Sozialismus und Politik*”であり、1933年、2号まで発行され、SPD(ドイツ社会民主党)のマルクス主義陣営の見解を代表した。協力者は、SPD党员以外にも広くいた。
- (31) この点については、Helmut Heiber; *Walter Frank und sein Reichsinstitut für Geschichte des neuen Deutschland*, 1966に詳しい。またL.von Wiese; *Erinnerungen*, 1957, S.71ff.
- (32) D.Käsler; “Der Streit und die Bestimmung der Soziologie auf den Deutschen Soziologentagen, 1910~30” in: M.R.Lepsius (Hrsg.), *Soziologie in Deutschland und Österreich*, 1918~45, S.199ff.
- (33) E.Stölting, *ibid*, 1981, S.64ff.
- (34) 学問の“社会像”(soziales Bild)については、E. Stölting; *Das soziale Bild der Wissenschaft und die gesamtgesellschaftliche Reproduktion*, in: *Sopo* 8, 1977, S.59ff.

- (35) H.von Treitschke; *Die Gesellschaftswissenschaft, Ein Kritischer Versuch*, 1895. この点については、Howard BeckerとHarry Elmer Barnesの*Social thought from Lore to Science*. 2Bde. 1983にも詳しい。
- (36) W.Dilthey; Einleitung in die Geisteswissenschaft, in Ders.; *Gesammelte Schriften*, Bd. 1, 1959, S.420ff.
- (37) アカデミックな社会学とマルクス主義との関係は特によそよそしかった。著名な社会学者の中には、時には社会民主主義に同情的な者もいたが、さりとてマルキストではなかった。Alfred Meusel (1896~1960) の如きは、亡命中にマルキストになり、フランクフルト社会調査研究所の第一世代は、アカデミックな社会学からはかなり距離を保っていた。20年代に活発かつ影響力をもったマルクス主義の議論は、社会学以外でおこなわれたのである。なおMeuselは、アーヘン大学の教授であったが、1933年亡命、デンマーク、イギリス、自由ドイツ研究所（ロンドン）所長、1946年帰国し、旧東独で活躍した学者である。
- (38) C.H.Becker; *Gedanken für Hochschulreform* 1919, Ders.; *Kulturpolitische Aufgaben des Rechts*, 1919.
- (39) G.von Below; *Soziologie als Lehnfach*” in : Schmollers Jahrbuch, 49, 1919, S.1271ff. Ders.; *Zum Streit um das Wesen der Soziologie*” in: Jahrbuch für Nationalökonomie und Statistik 124, 1926, S.218ff.
- (40) L.von Wiese; *Die Soziologie als Einzelwissenschaft*, in: Schmoller Jahrbuch, 44, 1920, S.347ff. F.Tönnies; *Hochschulreform und Soziologie*, 1920.
- (41) Beckerが社会学を擁護したことは事実であるが、学際化を強調したため、Wieseらの批判を受けたのである。同時にBelowの軍国主義的新ロマン主義にも反対した。
- (42) Fritz.K.Ringer; *The Decline of German Mandarines-The German Academic Community, 1890-1933*-にくわしい。邦訳『読書人の没落』西村稔訳、153頁以下。
- (43) G.v.Below; *Die Entstehung der Soziologie*, Aus dem Nachlaß. hrsg., von Othmar Spann, 1928.
- (44) M.Rumpf.Hrsg; ”*Volk und Volkswissenschaft*” in: *Volksspiegel* 3. 1936. S.1ff.など。
- (45) E.Stölting; *ibid.*, S.357ff, S.404ff, S.424ff.

参考文献

Erhard Stölting; *Akademische Soziologie in der Weimarer Republik*, 1986.

Dirk Käsler; *Die Frühe deutsche Soziologie 1909 bis 1934 und ihre Entstehungs-Milieus-Eine wissenschaftssoziologische Untersuchung*-1984.

Klemens Wittebuhr; *Die deutsche Soziologie in Exil 1933-1945*. 1991.

Ordnung und Theorie.-Beiträge für Geschichte der Soziologie in Deutschland. 1986, Herausgeben von Sven Popeke.

Herausgeben von Josef Hulsdünker u.Rolf Schellkase, *Soziologiegeschichte-Identität und Krisen einer engagierten Disziplin*, 1986.

Paul Hochstim; *Nationalsozialismus und Soziologie-Zur Analyse gesellschaftlicher Aspekt des Nationalsozialismus*-1984.

Soziologie in Deutschland und Österreich 1918-1945

Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, Sonderheft 23/1981, Hrsg, M.Rainer Lepsius

その他、ナチス時代の雑誌等は、日本女子大学の山本鎮雄教授が滞独中入手されたものに依った。記して謝したい。

(すずき ゆきとし、本学科主任教授)